

バイブルランド：世界を騒がせる

アミール・ツアルファティ

- ギリシャのテサロニケからのメッセージ -

https://youtu.be/aiqXQ_AGCjo

ギリシャ北部、テサロニケの街から、おはようございます。私の後ろには、有名な白い塔があります。紀元前315年に、マケドニアの王カッサンドロスがここに設立した都市の要塞の象徴です。彼は、この町の名前を妻の名にちなんでつけました。彼女の名前は、父であるフィリップ王が、現在のギリシャの中心にあるテサロニケ地域のテサロニケ人がフォキダの人たちに勝利したことにちなんでつけました。ですから、“テサロニケ”とは、“テッサリア人の勝利”です。「Nica/ニケ」とは、「勝利」。テッサリア人は、テッサリアの人々。それで、“テサロニケ”という名前になり、彼は妻の名にちなんで、この新しい街に名づけたのです。それ以来、街がここに立っていました。

そして紀元前1世紀、紀元前55年頃に、ローマ人によって、都市の上に要塞が建設されました。そしてその街は、使徒の働き17章の時代、まさに、ここに存在していました。これは面白い時代で、パウロが二度目の宣教旅行を始めた時です。彼は使徒の働き15章のエルサレム会議があったエルサレムより、ずっと北に上がり始めて、シリアまで上がり、今日のトルコである小アジアに行きました。続いて、今日のギリシャ北部であるマケドニア、この地域の最初の主要都市に到着しました。使徒の働き17章によれば、それはテサロニケの街です。

彼らはアムピポリスとアポロニヤを通過して、テサロニケへ行った。そこには、ユダヤ人の会堂があった。パウロはいつもしているように、会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。
(使徒の働き17章1節から2節)

覚えていますか？パウロは外国の都市にいる時にはいつも、まずユダヤ人のところに向かい、彼らのシナゴグに行って、ユダヤ人にメシアについて話すことを習慣にしていました。彼らの救世主ではなく、パウロの救世主でもあります。彼は、自分がユダヤ人であるという事実を決して隠しませんでした。彼はそれを誇りに思っていて、メシアが確かに来たこと、それがだれであるのかを、彼の同胞や民と分かち合いたいと思っていました。それが当時、最大の疑問だったのです。

「救世主はだれなのか？」

そして、キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して、「私があなた方に伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。(使徒の働き17章3節)

パウロは、新約聖書を引用して言っていません。新約聖書はありませんでした。私がいつも言うのは、パウロは、ただの一度も新約聖書から説教をしたことはない。イエスは、新約聖書を一度も引用したことがありませんでした。ペテロは、一度も新約聖書の話をしていません。聖書が「聖書に基づいて」と言う時は、いつも、“初期設定”である旧約聖書です。したがって、『キリストは苦しみを受け、死者の中からよみがえらなければならないことを説明し、また論証して』というのは、旧約聖書の定義です。ところで、イエスが言っています。ルカ24章44節。

さて、そこでイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就することでした。」(ルカ24章44節)

イエスご自身が言われたのです。タナハ、聖書、旧約聖書に書かれていることは、すべて成就する。そして、もちろんパウロがテサロニケの人々の前に立っているとき、まさにそれが、彼が彼らに言ったことでした。

「私があなた方に伝えているこのイエスこそ、キリストなのです」と言った。（使徒の働き17章3b節）

まさしくこれが、イエスがメシアであると信じている私たちユダヤ人が、イスラエルで言うことです。私たちは、皆にこう言います。イエス。このイエス、ヘブライ語でイエシュア。「フ・ハマシア」彼が救世主です。イエシュア・ハマシア。私たちは、そう言います。そして面白いことに、聖書はこう告げているのです。

彼らのうちの幾人かはよくわかって…（使徒の働き17章4節）

面白くないですか？あなたが御言葉を宣べ伝えて、メシアについてだれかに言うと、だれが聞いているのか、だれが受け入れるのか、受け入れないのか、決してわかりません。あなたの仕事は、だれが「はい」と言うのかを前もって知ることはありません。あなたの仕事は、視聴数を数えることではありません。あなたの仕事は、数字を数えることではありません。あなたの仕事は、あなたの口を開いて話すことです。神の仕事は、残りを収穫することです。我々は収穫の労働者であって、すなわち、我々は話す必要があるのです。しかし、残りは神が行うのです。そういうことです。そして、興味深いのが、

彼らのうちの幾人かはよくわかって、パウロとシラスに従った。またほかに、神を敬うギリシヤ人が大ぜいおり、貴婦人たちも少なくなかった。（使徒の働き17章4節）

想像できるでしょう。静かなユダヤ人のコミュニティが、今や分断されているのです。皆さん、理解しておいてください。当時のユダヤ教はローマ帝国で“許可された宗教”だったのです。そして、ローマ人が決してユダヤ教を問題にしなかった理由は、ユダヤ人は、絶対に、決して、人を改宗させようとしなかったからです。彼らは決して、他のだれかのところに行って、「あなたはユダヤ人になるべきだ」とは言いませんでした。したがって、彼らはローマの異教にいかなる脅威ももたらさなかったのです。しかし、キリスト教とはなんなのでしょうか？「出て行って弟子を作り、世界に伝え、御言葉を宣べ伝えなさい」ではないですか？すべては、世界中で弟子を作ることです。ですから、想像することができるでしょう。まだキリスト教はありませんでした。まだ宗教はありませんでした。徒歩や船で移動している人たちがいて…、飛行機ではありません。そして彼らは、はるばるエルサレム、ユダヤ、サマリアから世界の四隅まで、ただ歩いていたので、驚きです。考えてみてください。テサロニケ、アテネ、ローマ、これらは非常に重要なローマの貿易ルートの主要な交差点に位置する都市です。想像できるでしょう。これは2000年前のインターネットです。これは、メッセージが他のどの方法よりも速く発せられる方法だったのです。ということで、分断されたコミュニティについて、話をしています。

ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、（使徒の働き17章5節）

あとでマーケットプレイス「アゴラ」をお見せしますが、ここからそれほど遠くありません。まだ、そこにあります。それは街の中心でした。あなたが誰かを見つけたいなら、良い人であれ、凶悪犯であれ、市場に行けばよいのです。

ところが、ねたみにかられたユダヤ人は、町のならず者をかり集め、暴動を起こして町を騒がせ、またヤソンの家を襲い、ふたりを人々の前に引き出そうとして搜した。しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱって行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。」（使徒の働き17章5節から6節）

「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます」皆さん、パウロとシラスが顔を見合わせて言っている様子が想像できるでしょう。「私たちが？世界中を騒がせて来た？」彼らは戦士ではなく、政治家でもない。そして指揮官でもなく、裕福でもない。彼らは、ただの人です。考えてみてください。彼らはただ、エルサレムから小アジアへ、そしてギリシャへ、その後、ローマなど他の場所にメッセージを運んでいた二人の男です。その彼らに肩書きが与えられました。「世界中を騒がせて来た者たち」私は、これは預言的だと思います。ちなみに、私は、その言葉は軽蔑的な意味合いで使用されたと信じています。しかし考えてみてください。ローマ人がイエスを十字架につけたときのことを覚えていますか？彼らは十字架の上に何と書きましたか？「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」ローマ人は、イエスがユダヤ人の王であると本当に考えていたと思いますか？もちろん違います。そこでも、それは軽蔑的な言葉でした。それがとても預言的であるということ、彼らは全く知りませんでした。しかし私が言いたいのは、彼らは自分がそれに属しているとは思わなかった肩書きが与えられたのです。そして、もし仮に町中で騒動を巻き起こしている者があったとすれば、それは、実に彼らだったのです。彼らに同意しなかったユダヤ人たちが、市内中心の市場“アゴラ”に行って、人々を集め、そして彼らは町で騒動を始めました。そして、彼らはパウロとシラスを自宅にかくまった同胞のヤソンを引きずり出したのです。告発は次の通りです。「ローマ人よ。目をさませなさい！これが、あなたの最大の危険です！」

しかし、見つからないので、ヤソンと兄弟たちの幾人かを、町の役人たちのところへひっぱり行って行き、大声でこう言った。「世界中を騒がせて来た者たちが、ここにも入り込んでいます。それをヤソンが家に迎え入れたのです。彼らはみな、イエスという別の王がいると言って、カイザルの詔勅にそむく行いをしているのです。」（使徒の働き17章6節から7節）

わお！考えてみてください。小さな十字架の1つから…、ところでローマ人はユダヤ人に何千もの十字架を立て、非常に多くの人々を殺しました。その中の1つの十字架から、ユダヤ人の王、イスラエルの王のメッセージは、はるか小アジアに、そしていまギリシャにまで届いたのです。彼らが行っているのは、基本的に「この人たちは皇帝にとって脅威であり、皇帝とは別の王を提示している」・・・イエスです。繰り返しますが、それは預言的です。イエスは皇帝よりもはるかに偉大です。これは預言的です。しかし、彼らは自分たちの言っていることを、理解していませんでした。激しく盲目になっていました。これは興味深いことです。そして、面白いことに、

こうして、それを聞いた群衆と町の役人たちとを不安に陥れた。彼らは、ヤソンとそのほかの者たちから保証金を取ったうえで釈放した。兄弟たちは、すぐさま、夜のうちにパウロとシラスをベレヤへ送り出した。（使徒の働き17章8節から10節）

面白くないですか？テサロニケを見てください。彼らは、こっそりと二人をそこから去らせました。「ここから出て行きなさい。危険です」彼は、そこには長くいませんでした。しかしテサロニケ人への手紙は、パウロが最初に書いた手紙として知られています。両方ではないにしても、少なくとも第1の手紙は、彼がコリントにいた間に書いたものであることが分かっています。覚えていますか？彼はテサロニケを去った後にアテネに下り、アテネの後、彼はコリントに行きました。彼が1年半滞在したのはコリントです。彼は、そこでいくつかの書簡を書きました。その後、もちろん彼はローマで2年間仕え、そのあいだ、多くの手紙を書くための時間が、とてもたくさんありました。しかし最初のもは、彼が始めたばかりの小さな会衆に宛てて書かれました。ここ、テサロニケです。会衆は？主に敬虔なギリシャ人です。ユダヤ人ではなく、敬虔なギリシャ人。そのことから、パウロがテサロニケ人に書いた2つの手紙でだけ、唯一、彼が一度も旧約聖書を引用しなかった理由の説明がつくかも知れません。それは、主に異邦人であった人々に宛てて書かれたためだと私たちは信じています。そして興味深いのが、「世界中を騒がせている」当時の“世界”とは、なんでしたか？ローマ帝国は、当時3300万人の人々を支配していて、その半分は奴隷でした。ですから、想像できるでしょう。1500万人と、別の1500万人の奴隷です。ちなみに、この書簡が執筆された時点では、エルサレムには4000人も信者がおらず、周りの様々な場所には、たった何百人がいただけでした。ただ私が言いたいのは、パウロがここにいた西暦50年、数学的にクリスチャンが世界を騒がせたとは言えません。

しかし考えてみてください。イエスのメッセージは、一部の人々にとってとても攻撃的で、彼らは、それが世界を騒がせていると思っていました。それに私は驚くのです。世界をひっくり返したのは、だれでしたか？二人の人です。イエスが「出て行きなさい」と言っていて、彼らは出て行きました。彼らは歩き、武装せず、哲学や異邦人の道で超・教養のある人物でもありませんでした。しかし、イエスは言われました。

わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。（マタイ5章11節から12節）

それから、彼らはどんな力を持っていましたか？彼らはどのような力で人と戦ったり、競争を走ったのですか？そして、どのように、この世界を騒がせるような仕事をしましたか？また、彼らがその力を受けたのはいつですか？使徒の働き1章8節では、こう言います。

しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして…

（使徒の働き1章8節）

見てください。唯一、聖霊が上に臨んだときだけ、

エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

（使徒の働き1章8節）

そして、文字通りパウロとシラスの旅は、エルサレムから始まりました。使徒の働き15章のエルサレム会議から。ユダヤからサマリヤに向かって、当時、知られていた世界まで。キリスト教は、このように始まりません。宗教としてではなく、道として。「いのちの道」私たちには、大いなる宣教命令が与えられています。マタイ28章19節。

それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け…（マタイ28章19節）

勅令は、明確でシンプルでした。たしかに、まずユダヤ人です。しかし、すべての国が御言葉を聞くべきであり、そして、彼らはそれを聞いた後、責任を負わなければならない。さて、メッセージの本質は何でしたか？正直に認めましょう。人々を惹きつけたメッセージの本質、そのメッセージの本質は何でしたか？本質は非常に明確でした。「希望がある」面白くないですか？

希望について読んでみると、まず第一に、異邦人がキリストについて知らなかったときのことを、聖書は次のように述べています。

そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。（エペソ2章12節）

もちろん、彼らは多くの偽の神を持っていましたが、望みもなく、神もない人たちでした。だから、パウロがアテネの人々に伝えた演説でさえ、彼は、彼らに話しました。

そのように私たちは神の子孫ですから、神を、人間の技術や工夫で作った金や銀や石などの像と同じものと考えてはいけません。神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。（使徒の働き17章29節から30節）

彼は言っています。

「はい、遊びは終わりです」

「これまでだ」

「あなたにはいま、希望がある。あなたにはいま、接ぎ木される機会がある」

「あなたにはいま、永遠のいのちのチャンスがある」

「あなたにはいま、真実が明らかにされました」

「あなたはどうしますか？」

あなたは、どうするつもりですか？興味深いのは、いま、希望について話をしていますが、詩篇16編9節では、次のように告げています。

わたしの心は喜び、魂は踊ります。からだは安心して憩います。（詩篇16編9節）

その希望があるときだけ、私たちは休むことができます。私たちは、その希望の中で本当に休むことができます。

愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって、互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。（ローマ12章9節から12節）

私たちは、パウロとシラスがテサロニケと呼ばれる場所に来ているのを見ています。彼らは、ユダヤ人でいっばいのシナゴークに行きました。ユダヤの人々は、伝統と宗教にしがみついているのです。それでいてギリシャ人は、私たちがちょうど読んだように、当時、望みもなく、神もなく、イスラエルの国から除外されていた。その人たちが、いまや希望を見いだしたのです。聖書は告げています。その希望とは、モノではなく、ある人のことである。第1テモテ1章1節では、こう告げています。

私たちの救い主なる神と、“私たちの望みなる”キリスト・イエスとの命令による、キリスト・イエスの使徒パウロから…（第1テモテ1章1節）

「彼是我々の希望だ」興味深いです。そして、希望とはなんですか？第1テサロニケ2章19節。

私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのはだれでしょう。あなたがたではありませんか。（第1テサロニケ2章19節）

ですから、主が私たちの希望であるだけでなく、彼（イエス・キリスト）が私たちを連れ去りに来られることが、私たちの希望です。繰り返しますが、主が私たちの希望であるだけでなく、主が、私たちを連れ去りに来られること、これが私たちの希望です。それが希望です。

ヘブル10章23節は、こう告げています。

約束された方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白しようではありませんか。（ヘブル10章23節）

ということで、彼は世に来て、あなたに希望を与えました。希望とは、彼（イエス・キリスト）が戻って来て、あなたを連れて行くことです。そして約束された方は真実な方です。美しいです。

ところで、その希望はいつ始まりましたか？よく考えるなら、希望は心から始まりました。たとえば、ペテロを見てみましょう。ペテロは、すっかり打ちのめされていました。覚えていますか？彼は、イエスを3回否定したのです。覚えていますか？彼は打ちひしがれ、落ち込んでいた。想像もできなかったのです。

「私は3年間、この救世主に従ってきた。そしていま、重要な瞬間に、『彼を知っているか』と聞かれたときに、私は『彼を知らない』と言ってしまった。私はその人を知らないと…」

彼は、自分のしたことが信じられませんでした。とんでもないことをしてしまった…と。そして、イエスは十字架上で死に、いま、彼らは彼を墓に運んでいる。そしてペテロは思っています。

「私は彼を裏切っただけではなく、私は彼の死に貢献したかも知れない。彼は死んだ。私には望みがない」

興味深くないですか？そして、ペテロの心の中で希望が回復されたのは、いつですか？彼がそれを書いています。第1ペテロ1章3節に、こうあります。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが、死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。（第1ペテロ1章3節）

イエスは実際に死んでいない、ということを経験したとき、その希望が彼を再び燃え立たせたのです。彼は復活した。ところで、復活がすべてを変えます。ペテロは敗北したユダヤ人から、征服者になりました。彼は、王や支配者の前に立つことを恥じませんでした。議会の前に立つことを恥ともせず、彼は証言を恥ともしませんでした。彼は刑務所に投獄されることにも動じなかった。これが真実であると、彼は知っていたのです。

**私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って…
（ピリピ3章10節）**

テトス2章。有名な箇所です。

というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、経験に生活し、祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさとしたからです。キリストが、私たちのためにご自身をささげられたのは、私たちをすべての不法から贖い出し、良いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のためにきよめるためでした。（テトス2章11節から14節）

素晴らしい。考えてみてください。希望のない人たちが、いまや希望を持っています。キリストのない人たちが、いまやキリストを持っています。イスラエルの国から除外された異邦人が、エペソ2章12節によると、いまや約束の契約の一部であり、希望を持っています。そしていまや、彼らはこの世において神を持っています。美しいですね。パウロはテサロニケの町を含め、どこにでも行って、2つのことを共有しました。

キリストが救世主である。永遠のいのちがある。
彼は、まもなく私たちを連れに来られる。

そこで今日、私からあなたにお聞きします。

あなたは、世界を騒がせることができる人ですか？
あなたは、聖霊があなたの中に、そしてあなたを通して働くことを許していますか？

それによってあなたは、今日を、天の御国のために生きていますか？

あなたはこの地球上において、天国の国籍ですか？

あなたがたは、まだここにいる間も、自身の行いや生き様で、天を表していますか？

あなたは自分自身を、重要な人間であるとは考えないかも知れません。あなたは自分自身を大切な人として考えないかも知れません。パウロとシラスも、自分自身のことを、そのようには見ていなかったと思います。しかし、神が彼らを通してされたことを見てください。武器なし、富なし、ときには健康もありませんでした。皆さん、彼らの人生は容易ではありませんでした。彼らの人生には試練があり、困難がありました。私は、いつも言いますが、キリスト教とは、トラブルの不在ではありません。そうではなく、キリスト教は、キリストの臨在です。私たちは覚えておかなければなりません。イエス・キリストは、私たちに、行って、弟子を作るように命じられました。だから、行って、世界を騒がせましょう。



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel :<http://beholdisrael.org/>

ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>

2019.07.21 (Sun)